2025・2026 年度 町田市立小山小学校 校内研究紀要

学び続ける子どもが育つ授業の創造
～自己理解と他者受容を軸に 個別最適な学びと協働的な学びを往還する授業づくり～

第 1 章 研究の概要

1. 研究主題と目指す児童像
本校は、町田市教育委員会が掲げる「学び続ける力」を育むことを具現化するため、研究主題を「学び続ける子どもが育つ授業の創造」と設定し、「学び続ける子ども」を次のように定義した。

2026年度 研究主題	学び続ける子どもが育つ授業の創造
副主題	自己理解と他者受容を軸に個別最適な学びと協働的な学びを往還する授業づくり
目指す児童像	自分を知り ちがいを力にしながら 仲間とともに学び続ける児童

【研究主題の設定理由】2025 年度までの研究から
2025 年度は、副主題を「思考を深める授業づくり」と設定し、教師が説明時間を精選し発言や交流の場を意図的に設定したことで、児童が主体的に思考し、発表する姿が多く見られるようになった。しかし、実践を重ねる中で、以下の課題が明確になった。

・発言や対話は活性化したものの、「なぜ自分の考えが変わったのか」「どう学べば分かったのか」といった自らの思考過程や学び方の変容を自覚できていない児童が見られた。
・友達の意見に対して「同じです」「なるほど」と受け止めるに留まり、他者の視点を自身の考えの再構築や学び方の更新に活かすまでには至っていなかった。
・授業後の振り返りが「楽しかった」「頑張った」という感想に留まり、「学び方」の振り返りが十分に行えていなかった。

2. 「自己理解」と「他者受容」の往還構造
2026 年度は、前年度までの課題を踏まえ、「自己理解」と「他者受容」を研究の柱に位置付けた。この二つは独立して育つものではなく、相互に影響し合いながら深まる。
自分を見つめ直す自己理解が他者の考えを受け入れる土台となり、比較や対話を通した他者受容によって自分の考えが更新され、さらに自己理解が深まる。この中で、個別最適な学びと協働的な学びを往還する。

3. 児童理解を起点とした日常的な授業改善
本校では、1 時間の授業における思考の深まりを大切にするとともに、子どもが自分の学びを振り返り、他者の考えを取り入れながら、自ら学び方を選び、次の学びにつなげていく姿を目指している。特別な 1 時間の公開授業を作り上げること（点の研究）だけではなく、日常の授業における児童の姿を見取り、問いを生み出し、実践・見取り・共有・改善を重ねる学び（線の研究）を研究の中核と位置付けた。

4. 研究構想図

目指す児童像

自分を知り ちがいを力にしながら 仲間とともに学び続ける児童

自己理解と他者受容の往還

自己理解	他者受容
自分の考え方や学習の状況を振り返り、できていることやつまずいていることを踏まえて、自分に合った方法を選び、次の学びを調整しようとする姿。	自分とは異なる考えや感じ方を認め、学びに取り入れようとする姿。相手のよさを感じ認め合う姿。

発達段階に応じた3つの STEP（成長プロセス）

STEP1 低学年	STEP2 中学年	STEP3 高学年
学ぶ喜びを知り、 安心して自分の考えを表す	学習を客観的に捉え、 多様な視点に触れる	自らの学びを舵取りし、 新たな価値を共に創る

実践 ⇒ 見取り ⇒ 共有 ⇒ 改善 ⇒ 次の実践

「児童アンケートによる量的変化」と「児童の姿による質的変化」の両面から検証する

研究主題

学び続ける子どもが育つ授業の創造

自己理解と他者受容を軸に 個別最適な学びと協働的な学びを往還する授業づくり

授業改善の5つの視点

1	教師の説明を精選し、児童が判断する場面を増やす
2	個・ペア・グループを、ねらいに応じて使い分ける
3	対話を意見交換で終わらせず、考えの変容につなげる
4	学習内容と学び方の両面から振り返る
5	ICT を思考の可視化・共有・再構築の手段として活用する

児童の実態

1	人懐っこく、周囲の人と親しみをもって関わる児童が多い
2	自分の考えや学習状況を振り返り、学び方を選ぶことに難しさが見られる
3	友達との関わりを楽しむ一方、異なる考えやよさを学びに取り入れる姿には個人差がある
4	自ら問いを見つける意欲が低い。また、調べたり質問したりする姿には差がある。
5	学習への意欲が低い。さらに、振り返りを次の学習につなげることに課題が見られる。

第 2 章 学び続ける子どもを育てる授業改善の視点

1. 発達段階に応じた 3 つの STEP（成長プロセス）

児童の発達段階に応じ、6 年間を通じて段階的に自立した学習者を育てるため、以下の 3 つの STEP を設定した。

ステップ	段階目標（目指す姿）	具体的行動・学びの姿
STEP 1 (低学年)	学びの喜びを知り、 安心して自分の思いや考えを表す	・自分の考えや気付きを素直に表現する。 ・友達との「同じ」「違い」に親しみ、多様な考えの存在を知る。
STEP 2 (中学年)	学習を客観的に捉え、 多様な視点に触れる	・比較を通して自らの学び方や考えの変化を振り返る。 ・「なぜ相手はそう考えたか」に関心を持ち、他者の視点を取り入れる。
STEP 3 (高学年)	自らの学びを舵取りし、 新たな価値を共に創る	・目標や課題に応じて最適な学習方法・学習形態を選択・調整する。 ・協働を通して一人では生み出せない新たな考えや価値を創出する。

2. 授業改善の 5 つの視点

日常の授業づくりにおいて教師が意識し実践する具体的な手だてを、5 つの視点として集約した。

	授業改善の視点	具体的な教師の働き掛けと意図
1	教師の説明の精選	解決方法や比較対照、進め方を教師が指定しすぎず、児童自身が選択・判断する場面を意識的に設定する。
2	学習形態の柔軟な選択と往還	「個で考える時間」と「ペア・グループで深める時間」等を学習のねらいに応じて柔軟に使い分け、思考を深める。
3	対話による考えの変容	単なる意見交換で終わらせず、「対話を通して自分の考えがどう変わったか」に焦点を当てて見取る。
4	学習内容と学び方の振り返り	「何が分かったか（内容）」に加え、「どのように考えたか・どのように学んだか（学び方）」を客観視させる。
5	ICT による可視化・共有・再構築	思考の記録・比較・共有・再構築のツールとしてタブレットを活用し、自己理解と他者受容を可視化・促進する。

3.「振り返り」の 3 つの視点

本校では、振り返りを単なる授業の終わりの感想欄ではなく、「次の学びの始まり」と位置付けている。教師は見取りの重点に応じて、自己理解、他者受容、次の学びへのつながりという 3 つの視点から振り返りを問い掛ける。

振り返りの視点	問い掛ける質問例（児童の意識）	育まれる資質・能力
① 自分の学習 （自己理解）	・何が分かったか？ ・どのような手順・方法で考えを進めたか？ ・どこで悩み、どう解決したか？	自己評価力・メタ認知・ 学習の自己調整

振り返りの視点	問い掛ける質問例（児童の意識）	育まれる資質・能力
② 友達との学習 （他者受容）	・友達の意見のどこを参考にしたか？ ・自分と友達の考えの違いは何だったか？ ・対話によって考えはどう変わったか？	他者理解・協働性・ 多様性の承認
③ これからの学習 （主体的態度）	・次は何を意識して取り組みたいか？ ・今日身に付けた方法をどう活かすか？	主体的に学習に取り組む態度・ 次の学びへの見通し

第３章 年間推進スケジュールと校内体制

1. 年間推進フェイズ

・フェイズ１（4～7 月）：研究テーマの確認、分科会の役割分担、公開研究授業の実施（全 8 本）。
・フェイズ２（7～11 月）：一学期の検証結果を踏まえた視点の共有、検証の反復、研究発表会の準備・実施。
・フェイズ３（12 月以降）：研究の総括、成果整理、次年度研究テーマおよび日常の授業づくりへの昇華。

2. 日常の授業改善を支える校内の仕組み

1時間の研究授業だけで終わらせず、学校全体の文化として授業改善を継続するため、分科会、おやまラボ、授業観察・OJT を日常の研究活動に位置付けている。

組織・仕組み	実施頻度・形態	主な取組内容とねらい
分科会 （学年会）	毎週金曜日	・取組内容 各学年・領域における児童の見取りや変容を共有し、翌週の具体的な授業の手だてを協議する。 ・ねらい 児童の学びの実態や変容を根拠に授業を振り返り、具体的な改善策を共有することで、組織的・継続的な授業改善につなげる。
おやまラボ （フリートーク）	随時（週 1～2 回）	・取組内容 職員室の特設スペースで、飲み物等を囲みながら日常の授業の悩みや児童の姿について気兼ねなく対話する。 ・ねらい 教師が日常の悩みや気付きを気軽に共有し、多様な視点から授業を捉え直すことで、新たな気付きや改善のヒントを得る。
授業観察・OJT	日常的に実施	・取組内容 指導教諭等を中心とし、特別な研究授業だけでなく日常の授業を互いに見取ってフィードバックを行う。 ・ねらい 日常の授業における児童の姿を互いに見取り、具体的なフィードバックを通して、教師自身の授業観や指導方法を見直す機会とする。

第 4 章 実践の成果と課題

1. 児童及び教師の変容

(1) 児童アンケート

児童アンケート 3 回の結果から、全校と学年集団の傾向を整理した。数値だけで成果を判断せず、公開授業で見られる児童の姿や授業記録と照らし合わせ、授業改善を考えるための資料である。

児童アンケート 質問文・回答方法

「あなたの気持ちに一番近いものを選びましょう。」

4:とてもそう思う／3:まぁまぁそう思う／2:あまりそう思わない／1:まったくそう思わない

Q1 授業の中で「なぜだろう?」「もっと知りたい!」と考えるのが楽しいですか。

Q2 自分で課題や問いを見つけて、調べたいと思うことがありますか。

Q3 友達の意見を聞いて、自分の考えが深まったり、新しい考えが浮かんだりしますか。

Q4 グループでの話し合い活動で、自分の考えを伝えようとしていますか。

Q5 友達と協力して、難しい課題を解決できたとき、うれしいと感じますか。

Q6 すぐに答えが分からなくても、あきらめずに考え続けることができますか。

Q7 分からないことを、そのままにせず、調べたり質問したりしようと思いますか。

Q8 授業の最後に、今日どんなことを学んだか、次にどうしたいかを考えるようにしていますか。

Q9 勉強は、新しいことを発見できる面白いものだと思いますか。

Q10 これからも、色々なことを学び続けたいと思いますか。

※集計方法 4 件法(4:とてもそう思う／3:まぁまぁそう思う／2:あまりそう思わない／1:まったくそう思わない)の平均値。肯定率は 3・4 の割合。2025 年度 1〜5 年生と 2026 年度 2〜6 年生を進級対応で比較。重複回答は最新を採用。

① 全校の傾向

全体平均	Q3 友達から考えを深める	Q8 学びを振り返る	Q10 学び続けたい
3.35 (2025年度 9 月比 +0.01)	3.43 (2025年度 9 月比 +0.03)	3.10 (2025年度 9 月比 -0.04)	3.62 (2025年度 9 月比 -0.05)

質問項目	2025 年 9 月	2026 年 3 月	2026 年 5 月	9 月→5 月	5 月肯定率
Q1 探究の楽しさ	3.23	3.27	3.27	+0.05	87.6%
Q2 問いを見付ける	3.09	3.26	3.24	+0.16	86.2%
Q3 友達から考えを深める	3.40	3.44	3.43	+0.03	90.4%
Q4 自分の考えを伝える	3.25	3.38	3.31	+0.06	84.3%
Q5 協働の喜び	3.62	3.66	3.66	+0.04	94.3%
Q6 粘り強く考える	3.40	3.36	3.37	-0.03	89.5%
Q7 調べる・質問する	3.28	3.25	3.16	-0.12	80.9%
Q8 学びを振り返る	3.14	3.13	3.10	-0.04	80.5%
Q9 学ぶ面白さ	3.40	3.39	3.38	-0.02	86.6%
Q10 学び続けたい	3.67	3.63	3.62	-0.05	93.7%

※ 項目の選定根拠 Q3・Q8・Q10 は「他者受容」「自己理解・学びの調整」「学び続けようとする姿」の代表項目

※ Q2・Q7 は 2025 年 9 月〜2026 年 5 月の変化量が最大の項目

②数値から分かること
・全 10 項目の平均は 3.35→3.38→3.35 と、おおむね同じ水準で推移した。
・Q2「自分で問いを見つけ、調べたいと思う」は 2025 年 9 月から 0.16 ポイント上昇し、Q7「分からないことを調べたり質問したりする」は 0.12 ポイント低下した。
・2026 年 5 月は、Q5「友達と協力して課題を解決する喜び」が 3.66 と最も高く、Q8「学びと次の行動を振り返る」が 3.10 と最も低かった。

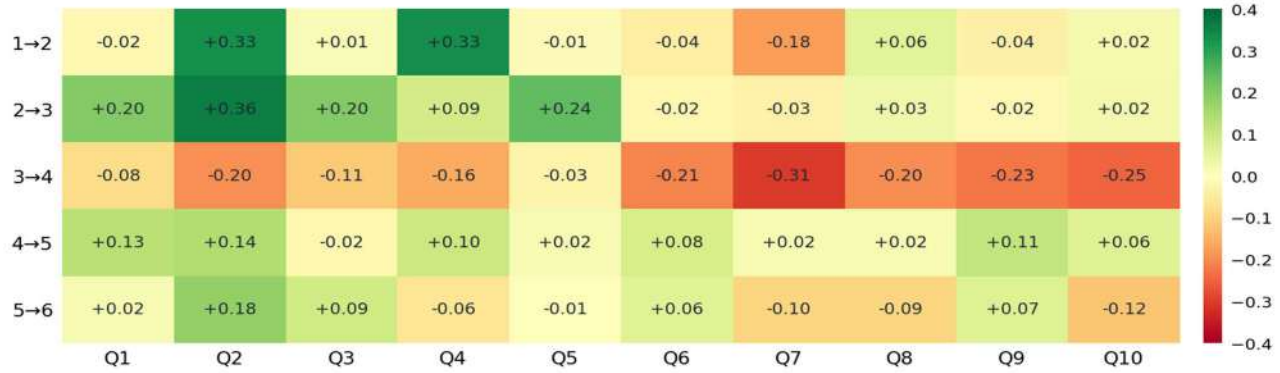
③本校の研究上の捉え
・Q2 の上昇から、自ら問いを見つけて調べたいという意欲の高まりがうかがえる。
・Q3「友達の意見による考えの深化」は 3 回とも高い水準で推移し、他者の考えを学びに生かそうとする意識がうかがえる。
・Q5 は 2026 年 5 月に最も高く、友達と協力して課題を解決することへの肯定的な意識がうかがえる。
・Q7 の低下は、分からないことを自ら調べたり質問したりする行動を支える働き掛けを検討する必要性を示唆している。
・Q8 は一貫して相対的に低く、学びを振り返り、次の学習につなげる経験の充実が授業改善の視点として考えられる。
・Q10「学び続けたいという意欲」を、Q2 に関わる主体的な追究や Q7・Q8 に関わる学習の調整につなげて捉える。

(2) 進級対応による学年別比較
2025 年度 1 年生を 2026 年度 2 年生として捉えるなど、同じ学年集団の傾向を比較している。回答者は各時点で異なり、個人の変化を示すものではない。

※ n=アンケート回答数

学年集団 (2025→2026)	2025 年 9 月	n	2026 年 3 月	n	2026 年 5 月	n
1 年→2 年	3.42	97	3.54	92	3.47	88
2 年→3 年	3.37	92	3.48	76	3.48	89
3 年→4 年	3.46	93	3.36	86	3.28	97
4 年→5 年	3.27	108	3.32	104	3.34	108
5 年→6 年	3.22	91	3.21	90	3.22	95

①項目別の変化
下図は、進級に対応させた各学年集団について、Q1～Q10 の平均値が 2025 年 9 月から 2026 年 5 月に何点変化したかを示したものである。縦軸は学年集団、横軸は質問項目。緑は上昇、赤は低下、数値は平均値の差を表す。



②数値から分かること
・1→2 年、2→3 年、4→5 年では平均値が上昇し、5→6 年ではほぼ横ばいで推移した。
・3→4 年では平均値が低下し、特に Q7・Q10・Q8 で低下が大きかった（図の赤色）。
・2→3 年では、Q2・Q5・Q3 が上昇した（図の緑色）。
・5→6 年では、Q7・Q8 がともに 3 点未満であった。

③本校の研究上の捉え
3→4 年の数値の低下については、学習内容の難化や成長に伴う自己評価の変化なども考えられるが、この結果だけで原因は特定できない。今後は、児童の発言や行動、振り返りなどと照らし合わせながら、その背景を丁寧に捉えていきたい。また、2→3 年で見られた問いをもつ意欲や協働への肯定的な意識の高まりを生かし、主体的な追究や対話を通した学びを充実させていく。さらに、5→6 年の Q7・Q8 の結果を踏まえ、分からないことを質問・相談できる場面や、自分の学び方を振り返り、次の学習を調整する機会を意図的に設定していく。

（3）教師が捉えた児童の変容
全校的な枠組みを基に、各教科・学年の特性に応じて意図的な学習場面を設定した。以下は、教師が授業の中で捉えた具体的な児童の姿を、自己理解、他者受容、学び方の獲得・工夫の視点で整理したものである。

対象	自己理解の深まり	他者受容の深まり	学び方の獲得・工夫
1 年 (生活科)	自分の発見や工夫をワークシートの絵やマークで自己評価する姿が見られた。	友達の遊びの工夫を見て「真似したい」「楽しそう」と自分の遊びに取り入れた。	体験と全体共有を繰り返し、自分に合った遊び方や工夫の広げ方を獲得した。
2 年 (道徳科)	登場人物の葛藤に自分を重ね、自らの考えや行動を見つめ直した。	役割演技や対話を通じて自分とは異なる見方や心情に気づき受け止めた。	考えを深めるための対話の方法や振り返りの重要性を実感した。
3 年 (学級活動)	話し合いから実践までの過程を振り返り、自身の行動を多角的に捉えた。	様々な立場の意見を認め合い、互いに納得できる合意形成を図った。	過去の振り返り記録を蓄積・参照し、次の活動をより良く改善する力を高めた。
4 年 (国語科)	「何を根拠にどう考えたか」を意識し、客観的に自分の思考を把握した。	文章の比較や交流を通して友達の着眼点の違いに興味を示した。	振り返りの 3 視点（内容・他者・今後）を意識して書く習慣が定着した。
5 年 (体育科)	自身の運動技能や課題に応じ、練習方法や個人のめあてを主体的に選択した。	仲間と得意・不得意を理解し合い、チーム内の役割調整を行った。	目指す動きと現状の自分の動きとの差を分析し、改善策を導き出した。
6 年 (体育科)	動画撮影等を活用することで、自らの動作を客観的に捉え、改善しようとする姿が見られた。	友達からの助言を素直に受け入れ、動きの改善に活かした。	交流後の振り返りで「誰のどの助言でどう変わったか」を具体的に言語化した。
さくらぐみ (特別支援)	写真や動画等の視覚的手がかりにより、自分の学習状況や成長を実感した。	友達の行動を見ながら協力して課題に取り組む姿が増加した。	一律ではなく、児童一人ひとりの特性に応じたタイミングで振り返りを行った。

対象	自己理解の深まり	他者受容の深まり	学び方の獲得・工夫
専科 (図工・音楽等)	自分の振り返りと教師の見取りを照らし合わせることで、自分の成長や課題を多面的に捉える姿が見られた。	教師が多様な表現のよさを具体的に伝えることで、子どもたちが友達の表現にも目を向け、互いのよさを認め合う姿が見られた。	教科の特性に応じた最適な学習方法を自分で選択する姿勢が育った。

(4) 教員アンケートから見えた教師の変容と課題

【アンケートの概要】研究を通した授業づくりの変化と課題、今後の方向性を整理するため、①以前大切にしていたこと、②研究を通して変わったこと、③変化につながった経験や児童の姿、④難しさや課題、⑤今後大切にしたいことの５項目について、教員の記述を整理した。

教員アンケートから見えた教師の変容と課題

【結果】
教員アンケートでは、研究以前から大切にしてきた「分かること」「主体的に取り組むこと」「安心して参加すること」などに加え、研究を通して、子どもの学びの過程や考えの変化、振り返り、次の学びへのつながりをより意識するようになったという回答が見られた。また、授業づくりにおける課題や、今後も授業改善を継続したいという意識も示された。

具体的な記述
授業観の変化：子どもの学びの過程や、友達との関わりによる考えの変化を意識するようになった。
変容のきっかけ：子どもの振り返りや授業中の姿、教師同士の授業観察・協議から新たな気付きを得た。
明らかになった課題：一人一人の学びの見取り、意味のある交流や振り返り、授業時間の確保。
今後の方向性：子どもの「やりたい」「もっと学びたい」を大切にし、学びを自ら調整できる授業づくりと、継続的な授業改善を目指す。

【考察】
教師の変容は、子どもの成長を実感することだけでなく、十分に見取れていなかった姿や学びの課題に気付くことからも生まれていると考えられる。子どもの姿を手掛かりに授業を捉え直し、教師同士で学び合いながら、次の実践につなげることが重要である。

2. 成果と課題

これまでの各分科会における授業実践や児童アンケート、教員による児童の見取りなどを総合的に考察し、本校の研究全体を通して見えてきた成果と課題を以下のとおり整理した。

(1) 成果

①自己理解を育む授業づくり

自分の考えや学習過程をノートや ICT で可視化し、学習状況を振り返る機会を設けてきた。その中で、初めの考えと現在の考えを比較して自分の理解やつまずきに気付いたり、自身の課題に応じて練習方法やめあてを選択したりする姿が見られた。こうした児童の姿から、自分の学習状況を捉え、学び方を選択・調整する機会を設けることの大切さを確認した。

②他者受容を育む授業づくり

学習のねらいに応じて個人・ペア・グループでの学習を取り入れ、異なる考えに触れる機会を設けてきた。その中で、友達の考えの違いやよさに気付き、自分の考えに取り入れたり、異なる視点から考え直したりする姿が見られ

た。また、教師も交流の活発さだけでなく、他者との関わりによって児童の考えがどのように変化したかに着目するようになった。

③振り返りの充実

「自分の学習」「友達との学習」「これからの学習」という三つの視点を共有し、単元や本時のねらいに応じた振り返りを位置付けてきた。その中で、児童が自分の考えの変化や友達との関わりを振り返り、次に取り組みたいことを捉える姿が見られた。また、教師にとっても、振り返りを通して児童の学習状況を見取り、次の授業で必要な働き掛けを考える視点が明確になった。

④教師の授業観の変容

教員アンケートからは、これまで大切にしてきた「分かること」「主体的に取り組むこと」「安心して参加すること」などを土台に、児童の学びの過程や、他者との関わりによる考えの変化、振り返り、次の学びへのつながりを、より意識するようになったという回答が見られた。

（2）課題

①一人一人の学びの見取りと支援

児童の発言や行動、ノート、振り返りなどから学びの過程を捉えることを大切にしてきた。一方で、一人一人の小さな変化やつまずきを十分に把握し、必要な働き掛けや支援につなげることには課題が見られた。

今後は、授業のねらいに応じて何を見取るのかを明確にし、発言や行動、ノート、ICT の記録などを組み合わせて児童の学習状況を捉えていく。また、各分科会で具体的な児童の姿を共有し、教師の問い掛けや学習環境、学習方法の選択肢などを検討することで、一人一人の実態に応じた授業改善につなげていく。

②対話の質の向上

個人・ペア・グループでの学習を取り入れ、他者との関わりによる考えの変化を大切にしてきた。一方で、考えを伝え合うことが中心となり、交流を通して自分の考えがどのように変わったのかを十分に捉えられない場面も見られた。

今後は、児童が自分の考えをもった上で交流に臨めるようにするとともに、考えの共通点や相違点、その理由に着目できる問い掛けを工夫する。また、交流後に自分の考えを見直す機会を設け、友達のどの考えを取り入れ、何が変わったのかを捉えられるようにする。こうした児童の姿を見取りながら、対話の場面や教師の働き掛けを改善していく。

③振り返りの質の向上

3つの視点を設け、振り返りを授業づくりに位置付けてきた一方で、自分の学習状況や考えの変化を具体的に捉え、次の学びにつなげることには個人差が見られた。また、教員アンケートからも、振り返りを意味のある活動にすることや、限られた授業時間の中で学習活動と振り返りの機会を確保することが課題として挙げられた。

今後は、単元や本時のねらいに応じて振り返りの視点を選び、児童が自分の考えを形成したり、学習方法を選択したり、友達と交流したりする活動を意図的に設定する。その上で、学習前後の記録や ICT などを手掛かりに学びを捉え直し、振り返りで明らかになった気付きや次に取り組みたいことを、その後の学習活動や教師の働き掛けに生かしていく。

第 5 章 研究の継承と今後の展望

1．これまでの学びを次の実践へ

研究を通して、目指す児童の姿を共有し、教師の働き掛けを工夫しながら授業づくりに取り組んできた。その中で、児童の姿を丁寧に見取り、教師の意図や働き掛けを振り返り、次の実践へとつなげることを大切にしてきた。

本紀要に示した成果と課題は、主に1学期までの実践や検証を中心に、10 月末までの取組を踏まえて、現時点で見えてきたことを整理したものである。今後も児童の姿を丁寧に見取り、実践と改善を重ねる中で、これらの成果と課題についても捉え直していきたい。
研究発表会も、これまでの取組を振り返り、新たな気付きを得る一つの機会とし、そこで得られた学びを今後の授業づくりに生かしていく。そして、今年度3月には、その後の実践や検証も踏まえ、研究全体の成果と課題を改めてまとめていく。

2. 児童の姿を起点とする学校文化の醸成

児童の姿を共有し、授業を見合い、対話を通して実践を振り返ることを大切にしてきた。教師それぞれの見方や考え方を持ち寄ることで、児童の学びを多面的に捉え、授業づくりについて考えを深める機会が生まれている。今後も、児童の姿を起点に、教師同士が気付きや考えを共有し、次の実践へとつなげる取組を重ねていきたい。
児童が仲間とともに学び続ける姿を目指すとともに、教師自身も互いの実践から学び合う。その積み重ねを小山小学校の授業文化として大切にし、今後の研究と授業改善につなげていきたい。